「至於犬馬皆能有養」解

松　尾　善　弘

(1989年9月22日　受理)

Make an Analysis of 'Zhìyú Quǎnmǎ Jiē Néng Yǒu Yàng'

Yoshihiro MATSUO

はじめに

子游問孝，子曰，今之孝者，是謂能養，
至於犬馬，皆能有養，不敬，何以別乎。
（『論語』為政第二）

通釈①　弟子の子游が，あるとき，親孝行について質問した。孔先生答えていうよう。このごろの孝行は，よく親を養えばよいということのようだ。しかし，犬や馬でも守禦したり労役を代ったりする形で人を養っているではないか。親を尊敬する心がなかったら，どうして人間と犬馬とを区別することができようか。

通釈②　子游が親孝行について質問した。孔子は次のように答えた。このごろの孝行とは，ただ飲食物を差し上げればよいということのようだ。しかし，犬や馬でも飼う以上はよく養っているではないか。親を尊敬する気持がなかったら，何で親と犬馬とを区別しようぞ。

上記の経文は，「至於犬馬皆能有養」の解釈のちがいによって，従来，このような二様の通釈がなされている。いま，わかりやすく，通釈①は古注の，通釈②は新注の解釈とみなして，両者の文法上の，また意味上の相異を究明していこうと思う。その考察を通して，最後に，現代中国語語法に関わる問題を二，三提言してみたい。

I　古注と新注の差異

十三経注疏本『論語』(魏の何晏集解，宋の邢昺疏）の注釈を整理し直して解説を加える。その際，①は，古注①つまり上記通釈①である。②は，古注②つまり上記通釈②であるが，その基本的立場は朱子（『四書集注』宋の朱熹）とほぼ合致する（＝新注)。

〔注〕①　包曰，犬以守禦，馬以代労，皆養人者。

〔注〕②　一曰，人之所養，乃至於犬馬，不敬，則無以別。

〔注〕③　孟子曰，食而不愛，豕畜之。愛而不敬，獣畜之。

①　包氏（包咸，後漢，会稽の人）は，「至於犬馬皆能有養」を，「犬は以て守禦し，馬は以て労に代る。皆人を養ふ者なり」といって，犬馬に至るまで人を養う，従って養うだけでは人と犬馬と異なるところがない，と注している。この解釈の立場に立って，上文を文法的に整理すると，次のようになる。「至於犬馬」が主語（主体語）で，「有」が，～を持つ，所有するという義の述語動詞である。「養 yǎng」が上声に読んで，飲食・衣服・住居などに不自由のない生活をさせてよく仕えるという，一般的・広義の意味で，ここでは「養ふコト」と名詞化して目的語となる。犬が人を護ったり，馬が人のために労役に従事することも，当然この「養」の義の中に含まれる。「皆」は現代中国語で頻用される，複数の主語を括って動詞につないでいく機能をもつ副詞「都」と同じ語とみなしておく。「能」は，そういうことができる，ありうる意の助動詞。以上をまとめると，「犬馬に至るまで（が）皆よく養うことがある」となり，目的語は「(犬馬）養（人)」である。

至於犬馬	皆	能	有	(犬馬）養（人）
〔主語（主体語)〕	（副詞）	（助動詞）	［動詞1］	［目的語］

②　一説ではこういう。人の養うものということでいえば，犬や馬だってそうである。そこに尊敬の気持がなければ，いったいどうして親を養うのと犬馬を養うこととの区別がつけられようか。

この注釈者の頭の中には，「至於犬馬皆能有養」の深層構造として，「人養犬馬（人ガ犬馬ヲ養フ)」がある。「至於犬馬」は目的語が提前されて主語（主題）になったものと考えている。従って同じく「主語」といっても，①のそれは述語動詞「有」とより緊密な関連をもつ，「主体」としての主語であり，②のそれは，本来目的語の位置にあったものが提前されたもの，あるいは話題として提示された主題としての「主語」である。②の場合の主語（主題）と述語動詞「有」の距離は，①の場合に比べてかなりの開きがあり（密接度が低い)，この「有」は，そういうもの・ことがある，存在するという義の存現を表わす動詞として捉えるほうがふさわしいと思われる。「養 yàng」義も，飲食物をさしあげて養うという狭義の意味で解釈している（詳細は後述する)。そして，「養」は，この注釈に即して復原すると，「(人）養（犬馬）（人が飲食物を供与して犬馬を養ふコト)」となるわけだから，明らかに存現文構造として捉えるのが最適と思われる。「犬や馬のことにまで言及するとすれば，（それらを）皆（人間が）養うということがよくあるではないか」

至於犬馬	皆	能	有	(人）養（犬馬）
〔主語（主題語)〕	（副詞）	（助動詞）	［動詞2］	［(主体語)］

以上，両者のちがいを三点にまとめると次のようになる。

(イ)「至於犬馬」が，①では主体主語，②では主題主語である。

(ロ)「有」が，①では，所有・保有の意味。②では，存在するという意味。従って②は存現文構造として捉えられる。

(ハ)「養」が，①では（犬馬）養（人）の省略形で目的語となり，②では（人）養（犬馬）の省略形で主体語（つまり存現文の「有」のあとにくる，従来「目的語」と呼ばれているものを，ここでは「主体語」と言っておく）となる。

ついでにつけ足すと，「何以別乎」の中味が，①では主体者として人間と犬馬との区別がつかぬということになり，②では，養育対象者として親と犬馬との区別がつけられなくなるということになる。

次に，この経文に対する朱子の注をみてみよう。先述したように，朱子の立場は注②と等しい。

○養，去声。別，彼列反。

○子游，孔子弟子。姓言，名偃。養，謂飲食供奉也。犬馬待人而食，亦若養然。言人畜犬馬，皆能有以養之。若能養其親而敬不至，則与養犬馬者何異。甚言不敬之罪，所以深警之也。

○胡氏曰，世俗事親，能養足矣。狎恩恃愛，而不知其漸流於不敬，則非小失也。子游聖門高弟，未必至此。聖人直恐其愛踰於敬，故以是深警発之也。

まず，「養」を「飲食供奉（飲食物を差し上げる）」という意味に限定し，読みも「去声」yàngとする。

子游は孔子の弟子。姓は言，名は偃。呉の人で孔子より45才の年少であった。(『史記』仲尼弟子列伝）魯の武城の代官となり，礼と楽で治めた話がある。また，学問に長じ，子夏と共に文学の科を以て許された四科十哲の一人である。

犬馬ハ人ヲ待チテ食ス，マタ養フガ若ク然リ。人ノ犬馬ヲ畜フニ，皆ヨク以テ之ヲ養フコトアルヲ言フ。若シヨク其ノ親ヲ養フモ敬至ラザレバ，則チ犬馬ヲ養フモノト何カ異ナラン。不敬ノ罪ヲ甚言シテ，深ク之ヲ警シムル所以ナリ。

胡氏曰ハク，世俗ノ親ニ事フルハ，能ク養ハバ足レリトス。恩ニ狎レ，愛ヲ恃ミテ，其ノ漸ク不敬ニ流ルルヲ知ラザレバ，則チ小失ニハ非ザルナリ。子游ハ聖門ノ高弟ニシテ，未ダ必ズシモ此ニ至ラザルモ，聖人タダ其ノ愛ノ敬ヲ踰ユルヲ恐ル。故ニ是ヲ以テ深ク之ヲ警発スルナリ。

ここで明らかに朱子は，「人畜（＝養）犬馬，皆能有（以）養（之＝犬馬)」といって，犬馬が人を養う説を「否定」している。

〔注〕③は『孟子』尽心上篇の一文である。いまその経文に対する，朱子の注を下に掲げて，ともどもに考察を続けたい。

○食，音嗣。畜，許六反。

○交，接也。畜，養也。獣，謂犬馬之属。

「食」「畜」「交」「養」はすべて「やしなう」の意である。(「交」は注疏本では「豕畜之」となっているが，集注本では「豕交之」となっている。)

孟子曰ハク，食ヒテ愛サザルハ，之ヲ豕交スルナリ。愛シテ敬セザルハ，之ヲ獣畜スルナリ。

孟子がいうには，ただやしなうだけで，愛情が伴わなければ，豚をやしなうのと同じである。愛するけれども尊敬の心がなければ，獣（つまり犬馬）をやしなっているのと変らない，と。

このあと，経文は「恭敬之心」の大切さを説く文章が続いている。いうまでもなく，この孟子の文を引用して補注した時の注釈者の解釈の立場は，注②のそれである。すなわち，孟子のこの文は②の解釈を支持していることになる。おもしろいことには，「豕畜（交）之」とか「獣畜之」のようにあまり耳（目？）なれない用語があって，これを文法的にどう説明するかが，本論の主題と関わってこれから解明すべき課題となる。

いま手許にある辞典で，〔獣＋V〕型の熟語を拾ってみると，(a) 獣伏，獣歩，獣睡，獣駭，獣擾，獣聚のグループと，(b) 獣畜，獣待のグループがある。(a)グループは，獣伏が，獣ガ伏スルとなるように，〔主述〕の関係で捉えることができる。それに対して，(b)グループの語構成は，獣待が，獣ヲ待スル，あるいは獣ノヨウニ待スルという風に，〔目的語＋動詞〕または〔修飾語＋動詞〕の関係として捉えることができる。すなわち，我々はここでも，漢語の語順は時として目的語を先に言って，恰もそれが主語であるかのような形をとることがあることを発見するのである。そこで，この目的語が提前されて主語の位置にあるものを「主語Ⅱ」と呼ぶことにしたい。つまり，普通に主語と呼んでいるものを，「主語」と「主語Ⅰ（＝主体語）」と「主語Ⅱ」に分け，「主語Ⅱ」には，本来目的語であったものを前にもってきて話題として提起した上記の形のものも含めて考えていこうと思う。

〔疏〕子游至別乎○正義曰，此章言為孝必敬。子游問孝者，弟子子游問行孝之道於孔子也。子曰今之孝者是謂能養者，此下孔子為子游説須敬之事。今之人所謂孝者，是唯謂能以飲食供養者也。言皆無敬心。

至於犬馬皆能有養，不敬，何以別乎者，此為不敬之人作譬也。其説有二。①一曰，犬以守禦，馬以代労，皆能有以養人者。但畜獣無知，不能生敬於人。若人唯能供養於父母，而不敬，則何以別於犬馬乎。②一曰，人之所養乃至於犬馬同。其飢渇，飲之食之，皆能有以養之也。但人養犬馬，資其為人用耳，而不敬此犬馬也。人若養其父母，而不敬，則何以別於犬馬乎。言無以別，明孝必須敬也。

〔疏〕子游ヨリ別乎ニ至ル。○正義ニ曰ク，此ノ章ハ孝ヲ為スニ必ズ敬スベキヲ言フナリト。子游孝ヲ問フトハ，弟子ノ子游，孝ヲ行フノ道ヲ孔子ニ問フナリ。子曰ク，今ノ孝ハ是レ能ク養フヲ謂フトハ，此ノ下ニ孔子子游ノ為ニ須ラク敬スベキノ事ヲ説クナリ。今ノ人ノ所謂孝ハ，是レ唯ダ能ク飲食ヲ以テ供養スルヲ謂フ。皆敬心無キヲ言フナリ。

「至於犬馬」以下の文は不敬の人の為に譬えにしたものであるが，その解釈に2説ある。①は，犬は守禦し馬は労を代って，皆よく人を養うものである。ただ畜獣は無知だから，人に敬心を生ずることはできない。もし人がただ父母を供養するだけで敬心を伴わなければ，どうして犬馬と区別

がつけられようか。②は，人の養うところは犬馬にまで及ぶ。犬馬の飢渇に応じて，飲ませ食わせてよく養うことがある。ただ人が犬馬を養うのは，人の用に資するためで，犬馬を敬することはない。人がもしその父母を養って敬しなければ，どうして犬馬と区別をつけられようか。区別がつけられないことを言って，孝には必ず敬が必要なことを明らかにしているのである。

〔疏〕注孔曰子游弟子姓言名偃○正義曰，史記弟子伝曰，言偃，呉人，字子游，少孔子四十五歳。

○注包曰至畜之○正義曰，云孟子曰者，案孟子尽心篇。孟子曰，食而不愛，豕交之也。愛而不敬，獣畜之也。趙岐注云，人之交接，但食之而不愛，若養豕也。愛而不敬，若人畜禽獣。但愛而不能敬也。引之以證孝必須敬。彼言豕交之，此作豕畜之者，所見本異，或伝写誤。

解説は省略する。ただ，先の「豕交之」「獣畜之」について，趙岐は「若（人）養豕也」「若人畜禽獣」と注している点に注目しておく必要があるだろう。敢て言えば，「豕交之」「獣畜之」の「念法」は，そのまま「豕交之」「獣畜之」と棒読みするのではなく，ましてや「豕交，之」「獣畜，之」と読むのではなく，「豕，交之」「獣，畜之」と切って読むべきであろうと思う。

Ⅱ　『四書考異』の古注①支持

『四書考異』仁和，翟教授灝著（皇清経解巻四百五十二　学海堂）はこの条文について次のような議論を展開している。注①支持の立場である。

〔皆能有養〕○四書辨疑曰，旧説，犬守禦，馬代労，皆有以養人者，但畜獣無知，不能生敬于人。上自謂能養，養字本読為去声，此養字当改為上声。

○金履祥，集註考證曰，至於犬馬皆能有養，作一句読。

『四書辨疑』元，陳天祥撰はこういっている。旧説は，犬は守禦し，馬は労を代り，皆もって人を養うことあり。ただ畜獣は無知なれば，敬を人に生ずることはできないという。上の自らよく養うと謂うの「養」の字は，もと去声に読んだ。この「養」の字は当然上声に改め読むべきである。

――すると，当該個所は，今之孝者是謂能養 yàng，至於犬馬皆能有養 yǎng，と読むことになる。先述した如く，犬馬の人間に対する奉仕行為を「養」義の中に含めて解釈するわけだから，ここでは“当然”広義の意味である上声に読んでおかねばならない。飲食物を与えて養うという狭義の解釈では整合性のないことを指摘したものである。

金履祥（元，蘭谿の人。字吉甫）の『論語集註考證』は，「至於犬馬皆能有養」を“一文として読め”と言っている。――その意味は，「至於犬馬」が主語になるということである。いいかえると，注②の場合は，「至於犬馬，皆能有養」と切って読み，「至於犬馬」が主語の位置にあるが，意味的には目的語になるということを示唆しているわけである。

〔不敬何以別乎〕○漢石経，無乎字。

○礼記内則，父母所愛，亦愛之，父母所敬，亦敬之。至于犬馬尽然，而況于人乎。

○又坊記，子云，小人皆能養其親，君子不敬，何以辨。

「不敬，何以別乎」の部分に関していうと，まず，漢の熹平石経には「乎」の字がない。

次に，『礼記』内則第十二に，父母ノ愛スル所ハ，マタ之ヲ愛シ，父母ノ敬スル所，マタ之ヲ敬ス。犬馬ニ至ルマデ尽ク然リ。況ンヤ人ニオイテヲヤ。とある。念のため，十三経注疏本『礼記』（孔穎達疏，陸徳明釈文）の当該箇所を下に引用しておく。

○曾子曰，孝子之°養老也，楽其心，不違其志，楽其耳目，安其寢處，以其飲食忠養°之，孝子之身終。終身也者，非終父母之身，終其身也。是故，父母之所愛，亦愛之，父母之所敬，亦敬之。至於犬馬尽然，而況於人乎。

上文の〔釈文〕が，楽音洛，下同。養，羊亮反。といっているところから，「養老」の「養」は上声で，「忠養之」の「養」は去声に読むことが判る。

さらにその〔疏〕で，後半部分の「孝子之身終。終身也者……」をとりたてて詳しく注釈しているところから察すると，我々はここでもまた，漢語の主語と目的語がかなり自由に位置を変え，かつそれに伴って少なからぬ誤解の生ずる恐れを古代人も無意識のうちに感じ取っていたらしいことを，はからずも発見するのである。

〔疏〕○終身也者，非終父母之身，終其身也者，作記之人，既云，孝子之身終，恐人不解謂言孝子事親至親身終。故解云，終身也者，非終竟父母之身也，終其孝子之身也。言父母雖沒，終竟是身，而行孝道，与親在無異。

坊記第三十。孔子がこう言った。小人でもみなその親を養うのである。君子たるものは（親を養うことはもちろん，これを）敬うのでなければ，（君子の孝と小人の孝を）どうやって区別しようか。

ここの陸徳明〔釈文〕は，辨，別也。養，羊尚反。である。小人が親を養うのは，単なる飲食の供与だから，当然「養 yàng」となるわけだ。

翟教授は，この坊記の文を注①支持の有力な根拠として引用しているのであるが，我々は翟氏がここで重大な見落しをしていることを指摘しなければならない。それは，この文が論語の経文とは全く異った文法構造であるということである。すなわち，この坊記の文は，漢語の典型的な構造である〔S－V－O〕であり，我々がいま問題にしている論語の経文も，注①のとりかたからいえば，同様に〔S－V－O〕の構文とみなしうることを先述した。しかし，両文の決定的なちがいの要素は，論語の経文には「有」があり，坊記の方にはないことである。つまり，「有」があることによって，論語の経文は二様の解釈が可能になる――注②の解釈がでてくるのであって，その場合の構文を

「存現文構造」として捉え，かつ目的語が前提された形の主語を「主語Ⅱ」と呼びかえておくことも先述した通りである。しかも，これまで引用されたわずかな関連文の中からさえ，我々は漢語がかなり自在に目的語を主語の位置に，文の冒頭に置くという現象をいくつも目にすることができた。自己の説の正当性を性急に主張するあまりに，「有」の有無を見落した翟氏のミスは重大である。

翟氏の議論は続く。

> 按旧解，具犬馬養人，人養犬馬二説。朱子特取其後一説，殆以内則文可参合故耶。然内則主父母所愛敬之人，言于此，未尽允。且犬馬但有可愛，無可敬，云亦敬之語，復未純也。同属礼記，与其参内則，似不若参坊記。坊記惟変犬馬為小人，余悉合此章義，而無駮辞。

考えてみると，旧解には「犬馬が人を養う」というのと，「人が犬馬を養う」という二説がある。朱子はその後者の説をとっているが，たぶん内則の文を参照したためであろう。しかし，内則の文は，父母が愛敬する人をテーマとしており，ここでそのことを論うのは妥当ではない。しかも，犬馬はただ愛すべきもので，敬すべきものではない。だから，「また同様にそれを敬す」という語は順当ではない。同じ礼記でも，内則を参照するよりは坊記を参照した方がよい。坊記の文はただ犬馬を小人に変えただけで，他はすべてこの章義に合致しており，反駁を許さないものがある。

> 荀子云，乳彘触虎，乳狗不遠遊。雖獣畜知愛護其所生也。束晳補亡詩云，養隆敬薄，惟禽之似。為人子者毋但似禽獣知反哺已也。皆与坊記言，一以貫之。即甚不敬之罪，此義已，深足警醒。更何必躁言醜語，比人父母于犬馬耶。

『荀子』に言う。母豚は虎にもつっかかり，母犬は遠くまでであるかないと。畜獣といえども，その子を愛護することを知っているのだ。束晳（晋，元城の人）の『補亡詩』に言う。養うこと厚く，敬うこと薄きは，禽鳥に似たりと。人の子たる者，ただ禽鳥の反哺（養育してくれたものに，おかえしとして食物を与え養うこと）を知るのみに似るなかれということだ。

これらは皆，坊記の言と一貫している。即ち不敬の罪を甚しとする，ただそれだけの意味であって，深くいましめとし悟らせるに足るものだ。何をことさらゴタクをならべて，人間さまの父母を犬馬と比べるなぞの必要があろうか。

――翟氏は内則の文が依拠するに足らぬ理由として二点をあげる。父母が敬愛する人間ということが話のポイントであることと，犬馬は「敬」すべき対象になりえないということである。しかし，犬馬はペットなどとして「愛」すべき対象にはなっても，尊「敬」すべき手合いではないという論法からいけば，そもそも孔子はなにゆえもともと「敬」とは「無（関）知」な犬馬を引き合いにして，孝行の核心となる「敬」の重要性を諭されようとしたのか，根本のところで大いに疑問が残る。人間の父母と犬馬を並べて論ずるのは心外だという言い方も，では人間さまと犬馬とを同列に並べて云々することには痛痒を感じないのかと反駁されるのは理の必然といえよう。そこで我々は，もちろんかかる内容面も同時に踏まえながら，文法的にも注①②のどちらに論理の整合性があるか，

厳然たる判定を下さねばならないのである。

孔穎達は，先の「身終」の注につづけて，「至於犬馬尽然」以下の経文に次のような注釈を加える。

〔疏〕至於犬馬尽然，而況於人乎者，言父母所敬愛犬馬之属，尽須敬愛，而況於父母所敬愛人乎。

（そういうわけだから，父母が愛するものは，同じようにそれを愛し，父母の敬うものは，同じようにそれを敬う。）犬馬に至るまですべてそうである。ましてや人間ならなおさらだと（いう経文）は，父母が敬愛する犬馬の類でも，すべて（孝子たるもの）敬愛すべきで，ましてや父母の敬愛する人についてはいうまでもないといっているのだ。（更にそれは父母の死後も自分が死ぬまで続く。）

――見る通り，内則の文は，本当の孝行息子というものは父母の敬愛するものを同じように敬愛すべきなのだということを強調して，もののたとえとして犬馬を引き合いに出しているわけである。翟氏のように，動物は尊敬すべき対象にならないといえばみもふたもなくなってしまう。逆に，極言すれば，犬馬だって尊敬すべきものがいないとはかぎらない。全体的にやや硬直化した思考法を伺わせる翟氏の議論といわざるをえない。

以上を要するに，翟氏の折角の証明にも拘わらず，引用例はことごとくむしろ注②の解釈を支持する結果になっている。考えてみると，注①が，犬が守禦し馬が労に代ることを人間への奉仕＝養とした出発点に，そもそも無理があったといえそうである。

Ⅲ　養（yǎng）と養（yàng）

子游問孝，子曰，今之孝者，是謂能養，
至於犬馬，皆能有養，不敬，何以別乎。

上記経文の解釈について，「養」字に着目しつつ，究明をつづける。

注①　養（yǎng）と上声に読み，一般的・広義の意味「養う」にとる。（『四書孝異』説）

注②　養（yàng）と去声に読み，部分的・狭義の意味「飲食物の供与」にとる。（『朱注』説）

それぞれの訓みに従って日本語訳すると次のようになる。

①――このごろの孝行というのは，自分ではよく養っていると思っているようだが，犬や馬さえそういう意味ではよく奉養している。（人間である以上は）尊敬の念をもたなければ，どこで（犬馬と）区別しようか。

②――このごろの孝行というのは，食べ物を差し上げればよいとおもっているようだ。単に飲食物を与えるということなら，犬や馬にだってそうしているのだ。（父母に対して）尊

敬の念を持って接しなければ，どうして（犬馬と）区別できようか。

『四書孝異』が自説の立証のために挙げた2例は，皮肉にも，意図に反して逆に②説を支持する結果になっていることは上述した通りである。すなわち，『礼記』内則の文「忠養之」に対しては，「養，羊亮反」の注があり，坊記の文「皆能養」にも「養，羊尚反」の注があって，両者ともに去声，つまり注②で解釈せよと示唆していたのである。

だが，この場合のように，「養」を去声に読み意味も狭義でとるという定式が，果して他のすべての経文に対してもあてはめられるかどうかは保障の限りではない。そこで，次には，その問題を究明していかねばならぬ義務が生じたことになる。

注②の説は，朱子の当該経文に対する注，「養，去声」，「養，謂飲食供奉也」に依った。すると，『論語』の中の他の用例としての，

子謂子産，有君子之道四焉。其行己也恭。其事上也敬。其養民也惠。其使民也義。（公冶長）
子曰，唯女子与小人，為難養也。近之則不孫，遠之則怨。（陽貨）

などには注がついておらず，従ってこれらの「養」は上声に読んで，意味も「生育」とか「待」という義に解するものがよいと思われる。つまり，朱子が「去声」と注したところは，意味も狭義にとるが，注のついていない箇所は「上声」で読んで，意味も広義に解釈しなけはればならない。

そのことを，次に『孟子』の中の「養」の全用例を拾いだすことによって実証しようと思う。表でみるように，61用例中，15例に「去声」の注がついており（2割強），他はすべて「上声」に読むとみなす。その場合，義訓として「養謂涵育薫陶」とか「養謂順而不害」あるいは「養，奉養也」と注している点に注目する必要がある。同時に，「去声」注の箇所には更に義訓として「餽養」という注があり，「飲食供奉」の意味を裏付けることになっている点も見逃すわけにいかない。

『孟子』篇名	例　文	朱　注
梁恵王上	是使民養生喪死無憾也。	×　撙節愛養之事也。
〃　下	君子不以其所以養人者害人。	×　土地本生以養人。
公孫丑上	北宮黝之養勇也。	×
	孟施舍之所養勇也。	×
	我善養吾浩然之気。	×
	以直養而無害。	×
〃　下	養弟子以万鍾。	×
滕文公上	不得以養其父母。	去声
	瘁者養也。	×　瘁以養老為義。
	無野人莫養君子。	去声
	八家皆私百畝，同養公田。	去声
	厲民而以自養也。	×
〃　下	由是観之，則君子之所養可知已矣。	×
離婁　上	吾聞西伯善養老者。（2出）	×②
	曾子養曽皙。／曽元養曾子。	去声②
	此所謂養口体者也。／若曾子則可謂養志也。	×②

『孟子』篇名	例　文	朱　注
離婁　下	中也養不中，才也養不才。	×　養謂涵育薫陶，俟其自化也。
	養生者不足以当大事。	去声　事生固當愛敬。
	以善養人，然後能服天下。	×　養人者，欲其同帰於善。
	不顧父母之養，一不孝也。／3出	去声③
	出妻屏子，終身不養焉。	去声
万章　上	労於王事，而不得養父母也。	×
	尊親之至，莫大乎以天下養。	去声　言瞽瞍既為天子之父，則
	以天下養，養之至也。	去声②当享天下之養。此舜之所
	百里奚自鬻於秦養牲者五羊之皮。	×　以為尊親養親之至也。
〃　下	孔子……有公養之士。／於衛孝公，公養之士也。	×②　公養，国君養賢之礼也。
	娶妻非為養也。而有時乎為養。	去声②亦有為不能操井臼，而欲
	悦賢不能挙，又不能養也。	×　資其餽養者。
	国君欲養君子。／2出　如何斯可謂養矣。	×③
	以養舜於畎畝之中。	×　能養能挙，悦賢之至也。
吉子　上	地有肥磽，雨露之養。	×
	苟得其養，無物不長。苟矢其養，無物不消。	×②
	皆知所以養之者。／不知所以養之者。	×②
	兼所愛則兼所養……則無尺寸之膚不養也。	×②
	養其小者為小人，養其大者為大人。	×②
	舍其梧檟，養其楚棘，則為賊場帰焉。	×
	養其一指，而失其肩背，而不知也。	×
	為其養小以失大也。	×　飲食之人，専養口腹也。
告子　下	養老尊賢。	×
尽心　上	存其心，養其性，所以事天也。	×　養，謂順而不害。
	吾聞西伯養老者。／2出	×②
	天下有善養老，則仁人以為己帰矣。	×
	所謂西伯善養老者，……便養其老。	×②
	居移気，養移体。	×
〃　下	養心莫善於寡欲。	×

「養」去声の例を若干補足しておこう。

『礼記』礼運　君者所養也，非養人者也。……養人則不足。（養，羊尚反，又如字）

『〃』祭義　君子生則敬養。（養，羊尚反）

『〃』文王世子　文王有疾，武王不説，冠帯而養。（養，羊尚反）

『〃』内則　夫入食如養礼。（養，羊尚反）

また『礼記』月令に，盲風至，鴻鴈来，玄鳥帰，群鳥養羞。なる文があり，養，余亮反とある。注に，羞，謂所食也。養也者，不尽食也。とあるところから，ここの「養 yàng」は，「羞（食物）を貯えておく（つまり供給の一形態）」意であることがわかる。

同じく，「養（上声）」のときの義訓をいくつか補足しておこう。

『周礼』天官冢宰　以安楽養其病。（養，猶治也）養之食之。（養，治也）

『周礼』天官大宰　養畜鳥獣。『礼記』月令　養壮佼。（養，長養也）

『礼記』内則　養老人。（養，奉養）　同王制　養老。（養，如字）

『礼記』王制　養庶老於虞痒。（痒之言養也）

以上の調査から，「養」は本来（上の“如字”）上声（以両切）で読み，一般的・広義の意味で使

われているが（――ということは，やしなう，そだてる，はぐくむ，飼う，おしえる，おさめるなど，さまざまな訳語があるということになる），去声に（弋亮切）読む場合も少なからずある。ただし，その時の意味は，ほぼ「飲食物を供給して養う」という狭義の意味に限定されて使われていることがわる。

このことを，元に戻って，問題にした経文にあてはめ直してみると，注①と注②の説の主張者がそれぞれ経文をどのように読んでいたか判然としてくる。注①者は上声で（少なくとも皆能有養の養は必ず上声で），注②者は両字とも去声で読み，解釈ともども辻褄を合わせていたわけである。

むすびにかえて

〔1〕「有」の種々相

そもそも「有」は語の出発点からして二つの起源をもつという（藤堂明保著『漢字の語源研究』）。その1は，「かばう，かこう」という基本義をもつ，「又，右，佑，宥，友，囿，或」などとグループをなす「有」で，《経傳釈詞》にも，有，猶或也。有，猶又也。有，猶為也。とみえる。

吾十有五而志於学。（論語，為政）　有は又なりと注がある。

或謂孔子曰……。（論語，為政）　或は有なりと注がある。

三分天下，有其二。（論語，泰伯）　天下を三分して，その二をたもつ。有は保有の意。

一方，「起こる，生じる」を基本義とし，「尤（異物が生じる），肬（コブ），蚶（カイ虫）」と同系のことば「有」は，《説文》に，「有とは不宜有なり」つまり，“あるべきでないことが突如としておこる”と説解される。辞書では一般的に，有無の有と説明される。

有顔回者。（論語，先進）　顔回なる者あり。

有事，弟子服其労。（論語，為政）　事あらば，弟子その労に服す。

ところが，この両義は，下文にみる如く，普通は混在して用いられており，截然と区別することが困難な場合が多い。

是故，君子先慎于徳。有徳此有人，有人此有土，有土此有財，有財此有用。徳者本也，財者末也。（礼記，大学）

「有」にはこの外にもさまざまな用法があり，いま一括して論ずるわけにいかないが，少なくとも基本的にこの両義のあることを押えておくと，文法構造の説明に便利なこと言を俟たない。

現代漢語でも，①「領有，具有，擁有，保有」などと注解される，所有を表わす「有」がある。

我有銭。／你有一本書。／他有両个孩子。／他母親有病。／我思想上有過一些波動。

他有着藝術家的气質。／這个人有学問。／我有件事跟你商量。／你有没有字典？

また，②「表示存在」とか「表示発生或出現」と注解される，いわゆる存在や出現を表わす「有」がある。（→存現文）

那里有十来个人。／樹上有両只小鳥。／屋里有人説話。／形勢有了新発展。／有人没有？

百貨大楼有這種尼龍傘賣。／河面上有几条小船開過来了。

①の用例を見れば分かる通り，文法的には〔主語（S）－動詞（V）－目的語（O）〕という漢語の中で最も普通に使われる構文である。そして，特徴的なこととして，主語がほぼ人間か擬人化した語であること，目的語が個別の物事であったり，抽象的な性質・ことがらであり，主語との関連が極めて緊密であることがあげられる。

他方，②の例は，まず主語（主題語「主語Ⅱ」）が場所や時間を表わすことばであり，そこに人やものやことがらが存在したり現われたりするという現象を叙述している文であることが特徴で，普通これを存現文と呼んでいる。

〔2〕 存現文構造〔主語Ⅱ（場所）――有$_2$（存現動詞）――主語Ⅰ（主体語）〕について

「有」には「所属[1]」と「存在[2]」の二大根本義のあること，従って同じ「～有～」の構文でも，前者のときは〔$S-V_1-O$〕の構造として，後者のときは「存現文」として扱うことは上述した通りである。時に，その両者の区別しがたいこともあるのは前述した通りであるが，一般的にいえば両者の違いは「我有銭。」が前者で，「桌子上有銭。」が後者である。「他有病。」は前者で，「他脳子里有病。」は後者とみなす。「他有汽車。」は前者で，「他家有汽車。」は後者である。「他很有両下子。」「這孩子果然有両下子。」「有名大学的教授都有両下子。」は前者で，「嘴上有両下子。」「這孩子嘴上有両下子。」は後者である。

ところで，この存現文は，「有無の現象」をはじめ，「予期せぬ出来事」や「天然現象」あるいは，「ことが起こった状態」を表現するものである。

門上有門環子。／院中有咳嗽声。／心里有病ル。／桌子上有一本書，很厚很大的。

家里来了客人。／他死了父親。／中国発生了革命。／這種情形其他地区也是有的。

門前生草。／天要下雨。／山間断人行。／打雷／刮風／退潮／開花／出水／立春／下太陽

墻上挂着一个帽子。／門口站着一个人。／床上躺着一个人。／桌子上放着一瓶花。

初めに場所語・時間語またはそれに準ずることばがきて（いまかりにそれを〔主語Ⅱ〕としよう），次にそこで発生・出現・消滅しあるいは存在する動詞をおき，そのあとその動作行為に係る主体となる語（――〔主語Ⅰ〕とする）がくる。

もし存現文のいい方，例えば「来了一个人」を普通のいい方〔S－V〕（一个人来了）にしようと思えば，やはり「有」を使った存現文にしなければならない。

前面来了一个人。→前面有一个人来了。

前面来了一条狗。→前面有一条狗来了。

この場合，「有」の主体語「一个人，一条狗」は，当然「来了」の主語となる。

〔3〕〔至於犬馬皆能有養〕＝〔$S-V_1-O$〕／〔$S_{II}-V_2-S_I$〕

注①の解釈者が「至於犬馬皆能有養」を〔S－V－O〕の構造で捉えていることは前述した。その

場合，「有」の意味を上記①の「具有」の意味で理解していると考えるわけだが，そのヒント（あるいは証拠といってもよい）になったのが，『四書孝異』が拠りどころとした「坊記」の文，

子云，小人皆能養其親，君子不敬，何以辨。

である。みる通り，上文には「有」がない。つまり翟教授は，うっかり（？）したかまたは「無視」して，「有」の存在を認めていない。裏返していうと，その程度に認識される——あってもなくてもよい——字であるということを意味する。更にいい換えると，主語〔犬馬〕と動詞〔養（当経文の場合は養ナフコトと名詞化して目的語とすることも前述した）〕とが緊密に結びついて，他の語の介在を要しないと認識されていたとも言えるわけである。結論として，注①説がなりたたないことは既に証明したところであるが，その問題とは別に，そのような構文と意味を持つと「解釈」した事実は厳として存在するわけである。そして，その事実をどのように矛盾なく「説明」するかが，もう一つの本論文の使命でもあったわけである。

そこで，次に注②の解釈者が当文を存現文構造〔$S_{II}-V_2-S_I$〕と捉えていると判断し，「至於犬馬」を〔主語Ⅱ〕と呼ぶことの妥当性を追求し，かつ存現動詞のあとにくる語を〔主語Ⅰ〕と称したことの理由も述べておかねばならない。

黒板上写着很多字。／門前停着几輛小汽車。／墻上挂着一張地圖。（場所）

今天下了一場大雨。／戦争中死了很多人。／北京的三月時常刮大風。（時間）

情況已経有了変化。／我們公司調走了三个人。／這種情形其他地区也是有的。（ことがら）

これらの文で〔S_{II}〕にあたるのは，「場所」「時間」「ことがら」であり，〔S_I〕にくるのは「人・もの」や「自然現象」「抽象化されたことがら」などである。下文はそれが少し複雑になったものである。

這ル夏天常打雷。／屋子里桌子也有，椅子也有，就差几个書架。
S_{II} S_{II} V S_I S_{II} S_I V_2 S_I V_2 V S_I

〔S_{II}〕の「ことがら」の中に，本来目的語であったものが提前され述語の前にきているものも含めて考えると，中国語の主語は，主題としての一般的〔主語 S〕と主体語としての〔主語 S_I〕およびこの〔S_{II}〕の三種に分類することができる。

他 人 好。／我 肚子 疼。／你 身体 好 嗎？／你 臉色 不好，怎麼了？
S S_I P S S_I P S S_I P S S_I P P

他 今天 又来了。／你 今年 多大歳数？／你 明天 再来一次吧。
S S_{II} P S S_{II} P S S_{II} P

我們 工作 很忙。／他 学習 很緊張。／那封信 写好 了。
S S_{II} P S S_{II} P S_{II} P

你 网球 打得 真不錯啊！／她 歌ル 唱得 很好听。／你 漢語 説得 很流利。
S S_{II} P S S_{II} P S S_{II} P

学習中文　要認真地学習。／屋子里干浄，你也舒服，我也舒服。／多一点ル　好。
S_{II}　P　S_{II}　S　P　S　P　S_{II}　P

このように考えると，従来，主述述語文とか目的語が提前された文章で，いくつかの「主語」をもつ文をかなり整然と説明できるし，なによりもそれを存現文の場合にも適用して文構造を分析できることは，学校文法論としても有効だと思われる。